第1回

モーツァルト交響曲 全曲演奏会

2008年3月2日(日)

◆開演◆ 14:30◆

会場：深志教育会館

主催：モーツァルト交響曲・全曲演奏会 実行委員会
共催：長野県松本深志高等学校音楽部志音会・松本室内合奏団・安曇野シンフォニー楽友会・松本あづみの音楽祭
後援：松本市・松本市教育委員会・塩尻市・塩尻市教育委員会・安曇野市・安曇野市教育委員会・(社)才能教育研究会
信濃毎日新聞社・SBC信越放送・NHK長野放送局・長野エフエム放送・(財)八十二文化財団

よこしまかつと

プロローグ　永遠の子供の神話

何人かのすぐれた観察者が子供の頃のモーツァルトを調べて、彼の天分が本物であることを認め、かれの神童的な才能を記述したすばらしい報告書を公にしている。イギリスの法律家で音楽学者のデインズ・バリントンは、ロンドン滞在中の9歳のモーツァルト(今日演奏するKV16はこの頃の作品)を訪問し、いろいろなテストを行い、その結果をロンドンの王立協会に報告した。協会はこれを受けてその内容を1770年の＜哲学会記録＞の中で公表した。バリントンは最初は疑ってかかっていたにもかかわらず、しまいには、音楽史家のチャールズ・バーニーが呼ぶところの"早熟にしてほとんど超自然的な才能"を認めざるを得なかった。たとえばモーツァルト少年の初見の読譜能力について、バリントンはこんなふうに書いている。「今までに見たことのないような天才的なセリフ回しでシェクススピアを読む、それも八歳の子供(これはたぶん父レオポルトがわざと1才若くアマデウスを紹介していた為と思われる)が、かの有名なギャリックのような悲痛な調子を帯びて演じたとする。たとえばこういうことが考えられるだろうか。その同じ子供が眼を輝かせながら、先ほどのセリフの解説を意図した三種類の注釈を読み上げるのだが、一つはギリシャ語で書かれており、二つ目のはヘブライ語、三つ目はエトルリア語で書かれている・・・・もしそんなことがあり得ると思えれば、この少年の能力を理解するよすがとなろう」・・・・・メイナード・ソロモン著「モーツアルト」より

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルトは1756年1月27日にオーストリア、ザルツブルグのゲトライデガッセに生まれた。後年父レオポルトは妻がお産のときにほとんど危険な状態になったと回想している。3歳の時に鍵盤楽器の手ほどきを受け始めこの頃から楽器の前にいつまでも坐って「三度の音程を探して鳴らすことがお気に入り」であり、その後曲を学び始める。父は誇らしげに書き込みをしている。「このメヌエットをヴォルフガングは四歳で学んだ」、「このメヌエットとトリオは五歳の誕生日の一日前の一七六一年一月二十六日の九時半にヴォルフガングが三十分で習得した」といったようにである。

ここで4歳のモーツァルト少年のエピソードをご紹介しよう。
モーツァルト家と仲が良く宮廷トランペット奏者のシャハトナーはこう回想している。

・・・・・・最初はまるでちんぷんかんぷんだったので、私たちは大笑いした。だが、まもなく、父親にはその最も重要なもの、譜や音楽が読み取られてきた。彼はしばらくその紙切れを見ていたが、やがて、喜びと感歎の涙がその眼からこぼれた。見てください、シャハトナーさん、これはすべてきちんと正確に書けているんですよ。ただ実用的ではないですがね。それは難しくてだれも弾けません、と父親が言った。するとヴォルフガンゲルは「だからコンチェルトなんだよ。ちゃんと弾けるまで練習してくれなくっちゃだめだよ。いいかい、こうやってやるんだ」と言った。そして彼は弾いて見せた。すると彼が何を意図していたのかが、私たちにもわかってきた。・・・・・

7歳で最初のヨーロッパ旅行に出発。ミュンヒエン、アウグスブルグ、フランクフルト、ブリュッセル、一家は1763年11月にはパリに到着。そして翌年の1764年にはロンドンへ出発し、そこで今日演奏する交響曲KV16を作曲する。

●**交響曲　変ホ長調**　Sinfonie in Es KV16　(8歳　1764年8月か9月か1765年　ロンドンで作曲)
Molto allegro, Andante, Presto

ここで姉ナンネルは後年次のように回想している。
「ロンドンで、私たちの父があやうく死にかけるほどの病気にかかったとき、私たちはクラヴィーアに触れることは許されませんでした。そこで勉強のために、モーツァルトはあらゆる楽器・・・とくにトランペットとティンパニを伴う最初の交響曲を作曲しました。私は彼のそばに坐って、この曲を書き写さねばなりませんでした。彼が作曲をし、私が写している間、彼は私にこう言ったものでした。＜ヴァルトホルンにぴったりのことができるようぼくに注意してね!＞」

最初の交響曲KV16はたしかにこのころか、あるいは1765年にロンドンで書かれたものであるが、管はオーボエとホルンそれぞれ二本という編成であり、こうした点ではナンネルの記憶は正確ではない。しかしこの交響曲におそらく先立って生み出されたものと思われる、いわゆる「ロンドン練習帳」(K5a～15ss)は父親の病臥中のヴォルフガングの孤独な努力を明らかに示しているものといえよう。

・・・この練習帳は第2次世界大戦の終戦の混乱時に行方不明となり、近年ふたたび発見された。
表紙の裏にレオポルトの手で「ヴォルフガンゴ・モーツァルト所有、1764年、ロンドン」と記されている・・・・・・・

●**弦楽四重奏曲　ト長調**　KV80　(14歳　1770年3月15日　ローディで作曲)
Adagio, Allegro, Menuetto, Rondo

1770年の3月、モーツァルト父子はイタリアのミラノから30キロ強の距離にあるローディにいた。
ヴォルフガングは最初の弦楽四重奏曲を書き上げている。それは自筆譜上に「アマデーオ・ヴォルフガンゴ・モーツァルト作の四重奏曲。一七七〇年三月十五日夜七時、ローディにて」と記されていることから明らかである。この四重奏曲は最終的にはのちに第四楽章として＜ロンドー・アレグロ＞が追加されたが、はじめのかたちは＜アダージョ、アレグロ、メヌエットとトリオ＞の三楽章形式のものであった。モーツァルト自身、この四重奏曲については後年まで記憶に新しかったとみえ、1778年3月24日付のパリからの父宛の手紙で「ぼくが「ローディの宿屋で晩に作った四重奏曲」と記している。

●**ディベルティメント**　Divertimento KV136　(1772年　ザルツブルグで作曲)
Allegro, Andante, Presto

●**交響曲　ハ長調**　Sinfonie in C KV128　(1772年5月　ザルツブルグで作曲)
Allegro maestoso, Andante grazioso, Allegro

1772年の前半に書かれた有名な連作「ディベルティメントKV136、KV137, KV138」、ただ自筆稿の表紙には題されているがモーツァルト本人の筆跡ではない。5月には3曲の交響曲が書かれたそのうちの一曲がKV128である。

1772年モーツァルトは16歳、とりわけ彼の動静を伝える記録資料は決して多くはない。むしろ少ないといったほうが適当であろう。ただいえることは、連作のディベルティメント、劇場用セレナータKV126、そして交響曲にいたってはKV128をふくむ7曲が作曲されており、充実した作曲活動がうかがわれる。ただ8月以降イタリア旅行とへと父子あいたずさえて三たび出発する10月下旬までモーツァルト一家の消息を伝えてくれる記録はひとつも残されていない。

(参考文献:「モーツァルト書簡全集」白水社、「モーツァルト」メイナード・ソロモン著、「モーツァルト大辞典」ロビンズ・ランドン著)